様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　４ 年　５ 月 ３１ 日現在

機関番号：３２６７０
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2018～2021
課題番号：１８Ｋ０２２９２

研究課題名（和文）自然科学的人間観と人間形成論の関係に関する理論的・思想史的研究

研究課題名（英文）Theoretical and Historical Studies on the Relationship between Scientific Model of Human Being and the Bildungstheorie

研究代表者
今井　康雄（IMAI, Yasuo）

日本女子大学・人間社会学部・教授

研究者番号：５０１６８４９９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　3,300,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、自然科学的人間観の進展・浸透が教育思想に対して与えた影響を、とりわけ19世紀後半以降のダーウィン進化論と実験心理学の展開に即して検討した。従来考えられてきた以上にその影響は大きく、現代的な教育論の基本的な構造に自然科学的な人間観が深く組み込まれていることが明らかになった。自然科学的な人間研究は、人間をその内部にある「能力」の発現として捉え、教育を「力の訓練」と見るような教育の見方を支えることになったのである。

研究成果の学術的意義や社会的意義
本研究の研究成果は、現代の教育論の問題点を批判的に検討する上での基本的な視点を提供するものである。今日の教育論の趨勢は、教育の不確定性を除去するために教育を学の援助に還元し、学習を自然科学的に解明可能なプロセスに解消することで、教育に確実な科学的根拠とそれに基づくテクノロジー的な確実性を与えようとしている。しかし、このような教育へのアプローチは、教育の可能性を環境への適応に限定し、予測不能な新たなものを社会にもたらすという教育の創造性を限定することになってしまう、と考えられるのである。

研究成果の概要（英文）：We investigated influences of scientific models of human beings on the educational thought from a historical and theoretical standpoint. Focuses are laid on the situation in the last half of the 19th century and the beginning of the 20th century Germany. Darwinism and experimental psychology gave possibilities to elucidate human beings thoroughly in scientific manners. Such manners had remarkable influences on educational thoughts at that time. Consequences are following: Human being became considered to be a embodiment of the "abilities" rested somewhere interior within them, and the education became a deed to canalize the development of such " abilities" in a desirable way.

研究分野：教育哲学

キーワード：自然科学的人間観　人間形成論

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９（共通）

１．研究開始当初の背景

(1) 人間形成(ビルドゥング)および人間形成論(ビルドゥングステオリー)への関心　現代の教育論の注目すべき兆候として人間形成(ビルドゥング)という概念の再評価の動向がある。Bildung はドイツ語特有の概念であると言われ，この概念を核として展開されてきた人間形成論(ビルドゥングステオリー)もドイツ語圏特有の理論傾向として扱われることが多かった。しかし，近年ではイギリス教育哲学会の機関誌 *Journal of Philosophy of Education* が 2002 年に 200 頁近くにわたって特集「人間形成(ビルドゥング)と自由教育の理念」を組むなど，英語圏でこの概念に対する関心が芽生えている。日本でも，文化的文脈の違いを超えて人間形成論(ビルドゥングステオリー)の理論的可能性を探ろうとする試みが見られる[研究業績 13]。その曖昧さや伝統の負荷ゆえに人間形成(ビルドゥング)概念を回避する傾向さえ見られたドイツでも，近年では人間形成(ビルドゥング)概念の「ルネサンス」が語られるほどである(*Zeitschrift fuer Paedagogik* の 2015 年の特集「人間形成(ビルドゥング)――主導理念のルネサンス」)。

(2) その背景：自然科学的人間観・研究方法への対抗軸として　このように人間形成論(ビルドゥングステオリー)が国際的に関心を集める背景として，自然科学的人間研究の進展と教育領域へのその影響力の浸透という現代的状況を見通すことができるように思う。脳科学や遺伝学を始めとする自然科学的な人間研究は，因果性のレベルで人間を捉えることになるため，その論理を突きつめて行けば教育とエンハンスメントの境界さえ曖昧にならざるをえない[研究業績 4]。教育という活動の意義は望まれた結果の実現に限定されてしまう。対して，「人間形成(ビルドゥング)」という視点の下では，結果へと至る途上の経験が決定的な意味を持つ。人間形成(ビルドゥング)の帰結としての判断力は，因果的に作り出せるものではなく，経験を通して一人一人が自ら獲得する他はない。――このような人間形成論(ビルドゥングステオリー)の立場が，自然科学的な人間観の教育領域への浸透に対する対抗軸として再評価されていると考えられる。

以上のような人間形成論(ビルドゥングステオリー)の特質は，学校などでのフォーマルな教育活動を評価する際に，測定可能な結果(いわゆる「エビデンス」)にもっぱら規準を求めようとする近年の教育政策や教育研究の趨勢に対する，対抗軸としても役立つ。エビデンス指向の教育研究は，自然科学に範をとった経験科学的な研究方法に依拠することで，高い信頼性を持ったデータを教育領域に提供するが，同時にその因果論的な大前提ゆえに，教育の活動を結果に還元し，自然科学的人間観を自己成就的に強化することにもなる。エビデンス重視の教育政策・教育研究に対しては，教師の専門的判断の無力化という問題を中心にして，様々な批判が出されている[cf. 研究業績 8]。人間形成論(ビルドゥングステオリー)は，その「経験」重視の教育理解によって，こうしたエビデンス批判の試みにも理論的根拠を提供するだろう。

(3) 対抗図式の不十分――本研究の核心的問い　以上のような人間形成論(ビルドゥングステオリー)を拠り所とした対抗戦略は，人間形成論(ビルドゥングステオリー)自体の主張がどれほど正鵠を射ているとしても，自然科学的な人間観や研究方法を＜外部＞に追いやっているという点で不十分なものにとどまる。人間形成論(ビルドゥングステオリー)が拠り所とする哲学の領域においても，近年では哲学を(自然)科学との連続において捉えようとする自然主義や科学的実在論の考え方が台頭している[戸田山 2014; ドレイファス／テイラー 2016]。自然科学的な人間観や研究方法を＜内部＞に取り込みながら，なおかつ，人間形成論(ビルドゥングステオリー)の重要な洞察である人間形成(ビルドゥング)における「経験」の意味を確保しうるような教育論の構想が，現代においては求められている。そのような教育論をいかに構想するか――これが本研究の核心的問いである。

２．研究の目的

本研究は，19 世紀後半～20 世紀初頭ドイツにおける自然科学的人間観の浸透とそれに対する人間形成論(Bildungstheorie)の側の対応を思想史的に解明し，そのことを通して，現代における同様の問題状況に対する一定の理論的展望を得ることを目的とする。現代において，自然科学的な人間研究は，その研究成果のみならず，その研究方法においても，教育の領域に深い影響を与え始めている。教育の意義を測定可能な結果(いわゆる「エビデンス」)に還元するような教育についての見方が浸透するとともに，これに対する批判や反発も強まっている。このような対立状況の一つの源流を，実験心理学や進化論が勃興した 19 世紀後半に見ることができる。人間形成論(ビルドゥングステオリー)の伝統を持つドイツでは，自然科学的な人間観の浸透に対する抵抗も根強かった。当時のドイツの状況を再構成し，それを現代の理論水準と交錯させることで，自然科学的人間観と教育との適切な関係とはいかなるものか，またそれをいかに築くかについて説得力のある展望を提示したい。

３．研究の方法

上述の核心的問いに接近するために，本研究ではあえて思想史的な迂回路をとり，19 世紀後半から 20 世紀初頭にかけてのドイツの教育思想を研究対象とした。この時代のドイツは，一方で中・高等教育を軸に人間形成(ビルドゥング)理念の制度化が進むとともに，他方では進化論や実験心理学など，自然科学的な人間観・人間研究が勃興した時期である。そこには，前項で述べた現代的な問題状況の，一つの源流を見ることができる。この時期のドイツで，自然科学的な人間観・人間研究がどのように展開し教育領域に浸透していったのか(あるいは，いかなかったのか)，そしてそれに対して人間形成論(ビルドゥングステオリー)がどのように対応したのか――これを解明することをめざした。そのことによって、現代においては錯綜し見通しがたく見える自然科学的人間観と人間形成論(ビルドゥングステオリー)との関係を，より見通しやすい原初的な構図のなかで捉えることができたと考える。

４．研究成果

本研究では、自然科学的人間観の進展・浸透が教育思想に対して与えた影響を、とりわけ 19 世紀後半以降のダーウィン進化論と実験心理学の展開に即して検討した。従来考えられてきた以上にその影響は大きく、現代的な教育論の基本的な構造に自然科学的な人間観が深く組み込まれていることが明らかになった。自然科学的な人間研究は、人間をその内部にある「能力」の発現として捉え、教育を「力の訓練」と見るような教育の見方を支えることになったのである。

本研究の研究成果は、現代の教育論の問題点を批判的に検討する上での基本的な視点を提供するものである。今日の教育論の趨勢は、教育の不確定性を除去するために教育を学の援助に還元し、学習を自然科学的に解明可能なプロセスに解消することで、教育に確実な科学的根拠とそれに基づくテクノロジー的な確実性を与えようとしている。しかし、このような教育へのアプローチは、教育の可能性を環境への適応に限定し、予測不能な新たなものを社会にもたらすという教育の創造性を限定することになってしまう、と考えられるのである。

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計14件（うち査読付論文　3件／うち国際共著　2件／うちオープンアクセス　0件）

１．著者名 IMAI, Yasuo	４．巻 30
２．論文標題 Perfektion durch Evolution? Zu den paedagogischen Konsequenzen der Evolutionstheorie	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Paragrana. Internationale Zeitschrift fuer Historische Anthropologie	６．最初と最後の頁 264-274
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 MAKABE, Hiromoto	４．巻 30
２．論文標題 Bildung und Mahayana-Buddhismus -- eine Fallstudie ueber das Verhaeltnis vor dem Zweiten Weltkrieg in Japan	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Paragrana. Internationale Zeitschrift fuer Historische Anthropologie	６．最初と最後の頁 249-263
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 今井康雄	４．巻 30
２．論文標題 自然主義と反実在論の共演――なぜ「自然主義的反実在論」だったのか	５．発行年 2021年
３．雑誌名 近代教育フォーラム	６．最初と最後の頁 119-122
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 今井康雄	４．巻 786
２．論文標題 教育哲学から見た成人教育 -- 変容的学習論を中心に	５．発行年 2021年
３．雑誌名 月刊社会教育	６．最初と最後の頁 62-68
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 今井康雄	4．巻 1158
2．論文標題 世界への導入としての教育――反自然主義の教育思想・序説(5)	5．発行年 2020年
3．雑誌名 思想	6．最初と最後の頁 125-146
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 今井康雄	4．巻 1161
2．論文標題 世界への導入としての教育――反自然主義の教育思想・序説(6)	5．発行年 2021年
3．雑誌名 思想	6．最初と最後の頁 124-151
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 今井康雄	4．巻 122
2．論文標題 書評　眞壁宏幹『ヴァイマル文化の芸術と教育――バウハウス・シンボル生成・陶冶』	5．発行年 2020年
3．雑誌名 教育哲学研究	6．最初と最後の頁 58-64
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 今井康雄	4．巻 1144
2．論文標題 世界への導入としての教育――反自然主義の教育思想・序説(三)	5．発行年 2019年
3．雑誌名 思想	6．最初と最後の頁 105-135
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 今井康雄	4．巻 1149
2．論文標題 世界への導入としての教育――反自然主義の教育思想・序説(四)	5．発行年 2020年
3．雑誌名 思想	6．最初と最後の頁 166-183
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 今井康雄	4．巻 27
2．論文標題 「力」に焦点化する教育論の思想史的分脈――スペンサー・ニーチェ・デューイと進化論	5．発行年 2018年
3．雑誌名 近代教育フォーラム	6．最初と最後の頁 91-99
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 今井康雄	4．巻 1136
2．論文標題 世界への導入としての教育――反自然主義の教育思想・序説(一)	5．発行年 2018年
3．雑誌名 思想	6．最初と最後の頁 26-45
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 今井康雄	4．巻 1138
2．論文標題 世界への導入としての教育――反自然主義の教育思想・序説(二)	5．発行年 2019年
3．雑誌名 思想	6．最初と最後の頁 50-67
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 山名淳	4．巻 27
2．論文標題 自著紹介　山名淳・矢野智司編『災害と厄災の記憶を伝える－－教育学は何ができるのか』	5．発行年 2018年
3．雑誌名 近代教育フォーラム	6．最初と最後の頁 171
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

1．著者名 小野文生・山名淳・矢野智司・岡部美香・平田仁胤・生澤繁樹	4．巻 117
2．論文標題 教育哲学は〈災害と厄災の記憶〉にいかに向き合うのか――『災害と厄災の記憶を伝える』が提起しえたこと／しえなかったこと	5．発行年 2018年
3．雑誌名 教育哲学研究	6．最初と最後の頁 98-104
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計12件（うち招待講演　1件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 眞壁宏幹
2．発表標題 ハンブルク・リヒトヴァルク校（1921-1937）の文化概念　－民主主義社会で「文化」を教える
3．学会等名 日本ディルタイ協会（招待講演）
4．発表年 2021年

1．発表者名 今井康雄
2．発表標題 世界への導入としての教育 -- 反自然主義の教育思想・序説
3．学会等名 教育思想史学会
4．発表年 2020年

１．発表者名 眞壁宏幹
２．発表標題 近代仏教と教育をめぐる学説史的研究
３．学会等名 教育思想史学会
４．発表年 2020年

１．発表者名 山名淳
２．発表標題 眞壁宏幹氏著『ヴァイマル文化の芸術と教育――バウハウス・シンボル生成・陶冶』（2020）を読む――「破壊」と（根源の）「想起」をめぐる問いを中心に
３．学会等名 自然主義研究会
４．発表年 2020年

１．発表者名 Imai, Yasuo
２．発表標題 Perfektion durch Evolution? -- Zu den paedagogischen Konsequenzen der Evolutionstheorie
３．学会等名 Deutsche Gesellschaft fuer Erziehungswissenschaft（国際学会）
４．発表年 2020年

１．発表者名 今井康雄
２．発表標題 Beyond Differences in Language
３．学会等名 教育哲学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 眞壁宏幹
２．発表標題 ヴァイマル共和国期ハンブルクにおける陶冶・教育（ビルドゥング）のトポグラフィ――人文主義をめぐる諸相
３．学会等名 三田教育学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 眞壁宏幹
２．発表標題 バウハウスと「ハルモニアの思想」――「調和学」のアドレスをめぐって
３．学会等名 教育思想史学会
４．発表年 2019年

１．発表者名 Makabe, Hiromoto
２．発表標題 Die Bedingungen der Symbolgenese. Eine bildungstheoretische Betrachtung
３．学会等名 Universitaet Lueneburg
４．発表年 2019年

１．発表者名 Makabe, Hiromoto
２．発表標題 Die Rezeption des deutschen Bildungsbegriffs in Japan
３．学会等名 Universitaet Hamburg
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yamana, Jun
２．発表標題 Catastrophe, Commemoration and Education: On the Concept of Memory Pedagogy
３．学会等名 ALPE (Asian Link of Philosophy of Education) Winter Seminar
４．発表年 2019年

１．発表者名 Yamana, Jun
２．発表標題 Weg zu "Memory Pedagogy“ : Zu meiner Erfahrungen im Umgang mit Deutschland
３．学会等名 Second Interdisciplinary and Research Alumni Symposium
４．発表年 2018年

〔図書〕　計7件

１．著者名 今井康雄(編)	４．発行年 2021年
２．出版社 東京大学出版会	５．総ページ数 309
３．書名 モノの経験の教育学――アート制作から人間形成論へ	

１．著者名 Yasuo Imai (Technik, Aufmerksamkeit und Emotion. Zur paedagogischen Diskussion um den Film in Deutschland im fruehen 20. Jahrhundert, pp. 109-124)	４．発行年 2020年
２．出版社 Springer	５．総ページ数 312
３．書名 Paedagogische Anthropologie der Technik. Praktiken, Gegenstaende und Lebensformen	

1．著者名 眞壁宏幹	4．発行年 2020年
2．出版社 慶應義塾大学出版会	5．総ページ数 408
3．書名 ヴァイマル文化の芸術と教育――バウハウス・シンボル生成・陶冶	

1．著者名 リット(小笠原道雄・山名淳訳)	4．発行年 2019年
2．出版社 東信堂	5．総ページ数 104
3．書名 弁証法の美学	

1．著者名 齋藤直子／ポール・スタンディッシュ／今井康雄編	4．発行年 2018年
2．出版社 東京大学出版会	5．総ページ数 248
3．書名 ＜翻訳＞のさなかにある社会正義	

1．著者名 今井康雄	4．発行年 2018年
2．出版社 東信堂	5．総ページ数 344
3．書名 森田尚人／松浦良充編『いま、教育と教育学を問い直す――教育哲学は何を究明し、何を展望するか』東信堂，2019年2月（今井康雄「福祉の精神からの「教育」の誕生――メディアとしての教具はモンテッソーリの思想に何をもたらしたか」88-114頁）	

１．著者名 山名淳	４．発行年 2018年
２．出版社 東信堂	５．総ページ数 344
３．書名 森田尚人・松浦良充編『教育と教育学を問い直す』東信堂（山名淳「記憶の制度としての教育 ――メモリー・ペダゴジーの方へ 」、183-209頁）	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	真壁　宏幹 (MAKABE Hiromoto) (90229328)	慶應義塾大学・文学部（三田）・教授 (32612)	
研究分担者	山名　淳 (YAMANA Jun) (80240050)	東京大学・大学院教育学研究科（教育学部）・教授 (12601)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関			
ドイツ	Freie Universitaet Berlin			